

## 生きてみたい風景

東京大学 特任教授・建築学  
松村 秀一  
Shuichi Matsumura

## 職業柄と映画鑑賞

様々な動画配信サービスを利用できるようになり、無趣味の私などは休みになるとひたすら映画、それも古いものを観続けたりしている。昔の映画館のように、三本立てやオールナイト、あれを家でやっていく訳である。

もちろん特にな変わった観方をしているつもりはないのだが、やはり職業柄なのか、有名な建築や土木構造物やまちの風景が出てくると、映画の筋とは無関係にそこに目が留まってしまう。昔は、自分の講義で使える建築や土木構造物やまちの風景の映像を探して観てい

たこともある。

例えば、講義で高層建築のカーテン・ウォールについて話をする時には、巨匠アルフレッド・ヒッチコックの『北北西に進路を取れ』（一九五九年）の冒頭、タイトル・バックからの一連の映像を紹介した時期があった。

先ず、明るい緑一色の画面に、鉛

直方向の複数の濃い緑色の線と画面を斜めに横切る複数の同色の線が現れる。それらは画面上にグリッドを形成する訳だが、その上にヒッチコックやケリー・グラントたちが俳優の名、そして映画のタイトルが現れては消えていく。そうこうする内に背景の明るい緑色は消え、上から見た一九五八年のニューヨークの

幹線道路が映し出される。ただグリッドは色を変えるがそのまま存在する。次第に映像がはつきりしてくる。そして、それがアルミ製の方立てとそこに嵌め込まれたガラスに映る下界の道路の様子だとわかる。マンハッタンでも最先端の超高層ビルだった国連ビルのカーテン・ウォールだ。もちろんヒッチコックは建築関係者を意識してこのタイトル・バックを考えたのではないのだから、世界の大都市ニューヨークを象徴する風景として、工業社会を象徴する高精度のアルミ製カーテン・ウォールとそこに映し出される自動車社会の様子を選んだのだと理解して間違いないだろう。

土木構造物の例も一つ挙げておきたい。同じヒッチコック作品で、彼がまだイギリス映画界にいた時期の『二十九夜』（一九三五年）はどうだろう。竣工後まだ四〇年少々、あの長大スパンのフォース橋が重要な逃走場面に出てくる。しかも、この歴史的な橋の細部を近くから撮影した映像や、橋床から下を見た際の映像など、普通では見ることでできないフォース橋の風景を見ることができなのだ。

## 映画『張込み』の中の佐賀

土木も建築も、いわば風景を創る仕事である。このため、私のような映画の観方をする方は、読者の皆様の中にも少なくないかもしれない。ただ、私に関して言えば、最近少し観方が変わってきたようだ。

映画の中の風景、特にそこで暮らす人の営みを含んだまちや地域の風景に惹かれ、創る対象としてそれを観るのではなく、暮らす、或いは生きる場として観るようになって

てきたようなのである。年のせいかもしれないし、時代のせいかもしれない。

最近、久しぶりに監督野村芳太郎、脚本橋本忍、撮影井上晴二、原作松本清張、日本映画史に残る名作『張込み』（一九五八年、松竹、出演：高峰秀子、田村高廣、大木実、宮口精二他）を見返したのだが、映し出される風景に目が釘付けになった。

『張込み』というタイトルが示す

ように、映画のかなりの部分は、ある家に向かいの安宿の二階から見張り続ける二人の刑事の様子で占められるのだが、そのいわば「静」の場面との対照を意識してのことだろう、現地ロケによる「動」の風景映像がとても大胆で魅力的なのだ。

冒頭は横浜駅から佐賀駅に向かう当時の駅や列車、そして乗降客から成る鉄道の風景。最後の方で

「この風景の中で生きてみたい」

私はそう思った。単なるノスタルジーとも言えない切れない感情である。はつきり言葉にできなくて恐縮だが、そこには、風景を創る私たちが見つめ直すべきものがある筈だ。

映し出された風景の中で生きてみたいかどうか。そんな風に映画を観てみたらきつと発見があると思う。